

# 令和4年度ときめき短歌大会入賞作品一覧

## 【特選賞】

- 一 玉葱の種撒く子等に頼られて今朝は久びさ地下足袋を穿く
- 二 病む妻の下着を買ひに行く街にクリスマスソング流れてゐたり

湯浅 茂子  
設楽 春樹

## 【正賞】

- 三 夏野菜水くれ草とり怠らず親の苦勞を喜寿にて感謝
- 四 歳だねえかの日の母の呟きを胸底に聞く膝さすりつつ
- 五 鎌握り稲刈りながら捕まえし蝗が腰の袋に跳ねる
- 六 過去の事忘れゆく夫穩やかに幼子のごとわが帰り待つ
- 七 晩秋の紅葉の中に我が家の明るき厨に俎板の音
- 八 悴んだ手をあためてくれる君の大きな両手冬つていいね
- 九 さ夜更けて降り頻るらし遠くより雪搔く音の間遠に響く
- 一〇 仮初の祖父母となってお遊戯会姪の子供に亡き子重なる
- 一一 撚りゆるき夫手づくりの七五三縄の香りほのかに年は明けたり
- 一二 漕ぎ出した遺品の湖は果てしなく眺めてばかりの戻れぬ小舟

椎名 ヒロ子  
中村 齡子  
堀越 フサ  
鶉野 敏子  
湯浅 慧子  
木下 美樹枝  
石井 省三  
高橋 伸治  
杉山 郁子  
松島 啓子

【准賞】

- 一三 遠き日の恋のツールの貸ボートいまも舳ふや山の湖畔に 眞庭 義夫
- 一四 亡き夫の好む枝豆さつと茹でビールを添えて月の命日 永井 美代子
- 一五 産土のがに沢と言ふ小流れに母と摘みたる匂ふ芹かな 塩谷 多鶴子
- 一六 終の蔓諸手に探れば青紫蘇の葉叢にひとつ息づく胡瓜 秋山 充利
- 一七 なせるままされるがままの襤褸替え思い切なく仰ぐ天井 久岡 千代子
- 一八 母のいる老人ホームを尋ねれば先客ありし窓辺の蛙 多胡 陽子
- 一九 雪消えて下草青む梅林に散らすごとく咲く「瑠璃こぼし」 桑原 謙一
- 二〇 初詣で小五の孫に手をひかれ人混みさけてゆつくり歩む 今井 栄一
- 二一 朝餉終へ「菓飲んだか」「飲んだよ」が合言葉のごと今日の始まる 近藤 周雄
- 二二 魂迎へ夫の知らざる幼子の手を引く我の老ひは隠せず 吉原 道子
- 二三 花桃のやうな嬰生る昂ぶりにパールの指輪外して抱けり 池畠 敏子
- 二四 ふんわりと心を包みこむような「みつを」の詩の暦を捲る 中里 勢津子
- 二五 先生に優しく呼ばれ胸おどる何か嬉しい午後の教室 一英
- 二六 さよならと言ったくちびるあなたからプレゼントされた赤い口紅 乃笛
- 二七 不器用に洗濯物を畳む夫膝病む我に笑顔をかへす 國定 美子

- 二八 在りし日の吾子と遊んだ公園の赤きブランコ幼子ゆらす  
高橋 恵
- 二九 補助輪を外せし自転車五才児の挑戦たくまし転びては起つ  
平柳 雅子
- 三〇 肩に落つ白き抜け毛の払われて微笑返す金婚の旅  
川野 忠夫
- 三一 会う度に「ありがと、よかった」とくり返す施設に五年の友のおりふし  
木暮 ヨシエ
- 三二 園児等に乗せて散歩の乳母車もみぢ散る道ゆるりゆるりと  
石坂 ふさ子
- 三三 味噌小屋のあまたの石を選びすぐり白菜・大根漬け込みをする  
青木 静子
- 三四 かまきりの鎌ふりあげてあらがへばそのみ残し草取り終へる  
岡本 静子
- 三五 下記の日に出頭せよと一葉の採用通知にわが道決まる  
石坂 喜美江
- 三六 夫の手で散髪をするならわしがはや二十年永く続けと  
吉澤 克枝
- 三七 五年目の術後検診「異状なし」礼深くして言葉噛みしむ  
石井 ふみ子
- 三八 スーパーに並ぶも侘しこの秋のやせて小さき秋刀魚数匹  
木暮 ヒサ
- 三九 バス、トイレ、テレビもみーんなひとり占めその上庭には季節の花々  
車崎 淑子
- 四〇 こたつかこみ四人の老いの読書会サン||テグジュペリの世界を遊ぶ  
岸 恵美子
- 四一 街道の鬼門除けにと祖父植えし柗の花甘い香りを  
響 亘
- 四二 葱と吾をのせ逞しくペダル踏みし父は病ひの床に今臥す  
昇月子

【群馬県長寿社会づくり財団理事長賞】（最高齢者男女各1名）

〈男性〉

戦争無き世界の平和希いつつひたすら祈る暁の空

藤村 利男

98歳

熱き茶を啜りて思う逃れ行く多き人らに潔き幸あれ

〈女性〉

菅総理の落款しるき慶祝状町長より受く百歳吾は

立川 ツヤ子

101歳

百歳を祝ふと孫のプレゼント四世代なる家族のアルバム

【ときめき賞】（理事長賞をのぞく年齢上位者男女各5名）

〈男性〉

落ち葉つもり虫がかくれるこの季節日々常温のわがくらしあり

横田 昭二

96歳

遠い山が深い紫になるともみじの季節は終わりに近づく

親孝行受ける身となりしみじみと家族の愛のやさしさうれし

小池 光男

95歳

村一番いゝ娘は嫁ぐ東京へさみしくなると過疎の人々

小池 光男

95 歳

父母も逝き同胞たちも姉ひとり卒寿の吾れひとり旅行く

岩田 繁

93 歳

紫の衣まといし子持山往時を偲ぶ老いの身悲し

老いてゆくこの甘美さよ歌書を手に妻の遺影と一献の酒

富永 幸夫

93 歳

碧空に見放けむ赤城子持山雪かすか見ゆ上越山脈

日に日増し要害の山色あせて渡良瀬川の流れは寒し

福田 好雄

92 歳

桜舞う高津戸橋を歩きしは七〇年前の妻とであつた

【ときめき賞】（理事長賞をのぞく年齢上位者男女各5名）

〈女性〉

寒き朝赤城風を身に受けて遅刻せぬよう子等は駆けゆく

笠原 照代 97歳

「又来るね」と子らは約し帰りゆく後ろ姿を吾は見送る

特攻機三機編隊知覧征く見送る過去は永遠に忘れじ

加藤 貞子 97歳

凜として百四才の道をゆく拍手で祝う赤き蘭咲く

同胞の多きを嘆きし頃やありなれど弟妹吾おきて逝く

久岡 千代子 96歳

散歩する吾れにつきそう息と歩む小春日和の山の公園

細井 二三四 96歳

足腰の弱くなりたる吾が散歩息にいざなわれ山の公園

春なかば妹弟の別れ突然に涙おさえて前向き生きる

須田 和子 96歳

来る年は遠き八回干支兎百才人生目標とする